

第19回 上越市公文書センター出前展示会 (7月3日から9月2日まで)

「戊辰戦争と高田藩」

北越戊辰戦争の概要

慶応4年(1868)1月3日に起きた鳥羽・伏見の戦いから明治2年(1869)5月18日に終結した箱館戦争(明治2年9月末に「函館」に改称)までの新政府軍と旧幕府軍(佐幕派の同盟諸藩を含む)との一連の戦争を戊辰戦争といます。このうち、越後国内で行われた戦いを北越戊辰戦争と呼びます。

当時、越後国内の大多数の藩は、鳥羽・伏見の戦いで朝敵となった旧幕府及び佐幕派の諸藩の武力討伐に反対していました。また、柏崎には朝敵となった桑名藩の陣屋(刈羽・三島・魚沼など越後国内の分領を統治)がありました。慶応4年2月1日、旧幕府が越後国内の旧幕府領を高田(頸城郡内)、会津(魚沼郡内及び蒲原郡内)、米沢(岩船郡内)、桑名(三島郡内など)の4藩の預地にする通達を出したことから、中・下越には会津藩・米沢藩の前線基地が築かれ、両藩の影響力が強まりました。同年5月6日に結成された奥羽越列藩同盟には、越後から長岡・新発田(後に脱退)・村上・村松(五泉市)・三根山(新潟市西蒲区)・黒川(胎内市)の6藩が参加しています。ちなみに、高田藩は譜代大名でしたが、後述する経緯から新政府軍の先鋒として参加することになります。

北越戊辰戦争では、当初、高田に新政府軍の本営が置かれ、諸藩の兵が集結しました。加賀街道を進軍してきた加賀勢は高田の茶町(本町2)から春日町(本町1、南本町3)に、海路蒸気船で来越した薩摩・長州勢は直江津今町に上陸したのち高田の寺町に、尾張(当時、信濃国の旧幕府領を支配)・信濃勢は新井宿に、それぞれ宿営しました。

慶応4年閏4月21日(新暦6月11日)、新政府軍は二手に分かれて高田を出発しました。海道軍と呼ばれた本隊は奥州街道(北陸道)を、山道軍と呼ばれた支隊は松之山(三國)街道を進み、長岡で合流する経路をたどりまし。海道軍は、高田藩と薩摩・長州・加賀勢の総勢2,500人で構成され、参謀黒田了介(清隆)と同山県狂介(有朋)の指揮下にありました。一方、山道軍は、高田藩と薩

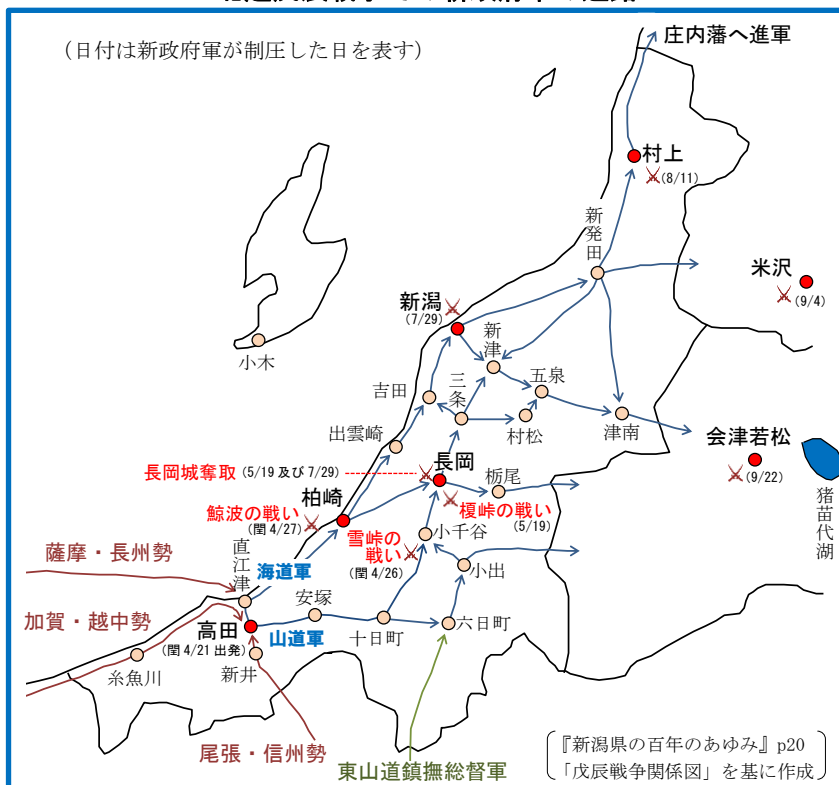
戊辰戦争関連年表

和(西)暦	月日	出来事
慶応3年(1867)	10月14日	公武合体派の建言を受けて徳川慶喜大政奉還
同年	12月9日	王政復古の大号令により、慶喜に対し内大臣職辞職と幕府領地の朝廷への返納を決定
慶応4年(1868)	1月3日	鳥羽・伏見の戦い(~4日)
同年	1月5日	北陸道鎮撫総督設置
同年	1月24日	高田藩重臣会議を開催し、高田藩の対応を決定(天皇への忠勤と慶喜の赦免要請)
同年	2月1日	旧幕府が越後の旧幕府領を高田・会津・米沢・桑名4藩の預地に指定
同年	2月3日	朝廷側につくかどうかを尋ねる勅書が高田藩に到着
同年	2月5日	高田藩が勅書の請書(返書)を提出
同年	2月10日	高田藩が慶喜に諫諍書(かんそうしょ/いさめ状)を提出
同年	2月23日	高田藩が朝廷に哀訴状を提出
同年	3月15日	勅使が高田に到着、翌日越後11藩の重臣を高田に召集
同年	3月17日	高田藩が朝廷に再度哀訴状を提出
同年	4月11日	江戸城明け渡し
同年	4月18日	古屋作左衛門ら旧幕府軍が高田に入り、狼藉をしないことを誓約
同年	4月23日	奥羽20余藩が白石列藩会議を開催(奥羽越列藩同盟の前身)
同年	4月26日	飯山城から敗走し川浦で休息していた古屋隊を高田藩が撃退
同年	閏4月8日	新井会議で新政府軍各藩が古屋隊に対する高田藩の対応を非難、高田藩が謝罪 奥羽越諸藩追討の勅書発布
同年	閏4月17日	新政府軍の先鋒隊が高田に到着。19日に参謀黒田清隆・山県有朋が到着
同年	閏4月21日	新政府軍が海道と山道の二手に分かれて高田を出発
同年	閏4月26日	雪峠の戦い(小千谷)
同年	閏4月27日	鯨波の戦い
同年	5月2日	小千谷の慈眼寺で長岡藩家老河井継之助と新政府軍軍監の岩村精一郎が会談するも決裂
同年	5月6日	陸奥・出羽・越後の31藩による奥羽越列藩同盟が成立
同年	5月15日	高田藩江戸詰藩士(神木隊)が彰義隊に加わり上野山で17名戦死
同年	5月19日	長岡落城
同年	7月25日	奥羽越列藩同盟軍が長岡城を奪還
同年	7月29日	再び長岡落城。同日、新政府軍が新潟町を占領
同年	8月4日	中越地方の全域を新政府軍が制圧
同年	8月11日	村下落城
明治元年(1868)	9月22日	会津藩降伏。(同日米沢藩、23日長岡藩、27日庄内藩降伏)
同年	10月	高田藩士凱旋
明治2年(1869)	1月17日~27日	会津藩の降伏人、計1,742人が高田寺町に到着
同年	5月18日	箱館戦争(五稜郭の戦い)終結
明治3年(1870)	6月	旧会津藩に斗南(となみ)藩設立が許可され、同藩へ降伏人引き渡し

北越戊辰戦争での新政府軍の進路

摩・長州・尾張・加賀・信濃勢の総勢1,500人で構成され、軍監岩村精一郎が指揮しました。

北越戊辰戦争では、長岡城をめぐる攻防が最も熾烈を極めました。新政府軍が一度制圧(5月19日)した長岡城は、奥羽越列藩同盟軍が奪還(7月25日)し、その後再び新政府軍が制圧(7月29日)しています。これを契機に、越後国内の同盟軍は会津に退却し始め、越後国内の同盟軍の最後の砦であった村上城も8月11日(新暦9月26日)に落城しました。その後、戦闘の場は庄内・米沢・会津に移りますが、9月になると5日に米沢藩、22日に会津藩、23日に長岡藩、27日(新暦11月11日)に庄内藩がそれぞれ新政府軍に降伏しています。北越戦争に限って言えば、新政府軍は1,040人(高田藩の越後及び奥羽での戦死者は、従軍者760人中70余人)、同盟軍は1,180余人が戦死しました。



高田藩は古屋隊から「粗暴な行為ははしない」という誓書をとって藩内を通行することを許しましたが、古屋隊は新井から飯山藩に入ると飯山真宗寺に陣を構えました。救援に駆け付けた尾張・松代の連合軍が4月25日に古屋隊を砲撃したため、古屋隊は新井に逃げ帰りました。連合軍が古屋隊を追って高田藩領まで迫ってきたため、高田藩としても古屋隊を放っておくことができなくなりました。高田藩は、古屋隊を新井から川浦代官所に移動させた上で、4月26日の夕方に古屋隊を砲撃しました。不意を突かれた古屋隊は、松之山街道を通過して会津軍が陣を張っていた小千谷に退却しました。しかし、古屋隊の領内通過を許した高田藩に不審を抱いた新政府は、軍監岩村精一郎を新井に派遣しました。閏4月8日、岩村は新政府軍各藩の代表者を集めて協議を行い、高田藩が謝罪しない場合は武力討伐することが決定されました。これを受けて高田藩は謝罪するとともに、以後、新政府軍の先鋒となり忠誠を尽くすことを誓約しました。

北越戊辰戦争直前に、新政府から不審を抱かれた高田藩

鳥羽・伏見の戦いの後、新政府は各藩に新政府に協力するかどうかを問う勅書を出しました。慶応4年(1868)2月3日に、勅書は高田藩にも届きました。これに先立つ1月24日、高田藩は鳥羽・伏見の戦いの結果を受けて重臣会議を開催し「天皇への忠勤を誓い、併せて慶喜の赦免を要請する」ことを藩の基本方針としており、勅書の請書もこの基本方針に沿って作成されました。

この後、新政府軍の不審を招く出来事が起こります。古屋作左衛門を隊長とする旧幕府軍歩兵約800人(後に衝鋒隊と名乗る)が越後にやって来たのです。古屋隊は鳥羽・伏見の戦いに敗れた後、下野国梁田宿(栃木県足利市梁田町)で再び新政府軍と戦って敗走し、会津へ向かいましたが、受け入れを拒否されました。古屋隊は越後に入ると、新発田→新潟→寺泊→与板→柏崎を通り、4月16日に柿崎に到着しました。高田藩は古屋隊から「粗暴な行為ははしない」という誓書をとって藩内を通行することを許しましたが、古屋隊は新井から飯山藩に入ると飯山真宗寺に陣を構えました。救援に駆け付けた尾張・松代の連合軍が4月25日に古屋隊を砲撃したため、古屋隊は新井に逃げ帰りました。連合軍が古屋隊を追って高田藩領まで迫ってきたため、高田藩としても古屋隊を放っておくことができなくなりました。高田藩は、古屋隊を新井から川浦代官所に移動させた上で、4月26日の夕方に古屋隊を砲撃しました。不意を突かれた古屋隊は、松之山街道を通過して会津軍が陣を張っていた小千谷に退却しました。しかし、古屋隊の領内通過を許した高田藩に不審を抱いた新政府は、軍監岩村精一郎を新井に派遣しました。閏4月8日、岩村は新政府軍各藩の代表者を集めて協議を行い、高田藩が謝罪しない場合は武力討伐することが決定されました。これを受けて高田藩は謝罪するとともに、以後、新政府軍の先鋒となり忠誠を尽くすことを誓約しました。

旧幕府軍・奥羽越列藩同盟軍に参加した高田藩士

戊辰戦争で、高田藩は新政府軍の先鋒として戦いましたが、旧幕府軍及び奥羽越列藩同盟軍に参加した高田藩士も存在しました。

まず、旧幕府軍に参加したのは、江戸藩邸詰の藩士200余人の中で脱藩した86人^(異説あり)です。高田にいた藩主榊原政敬は、江戸藩邸に再三使者を出し藩の基本方針を示して説得に当たりましたが、拒絶されています。脱藩藩士は、榊原家の「榊」の字を分けて神木^(しんき/しんぼく)隊を名乗り、旧幕府主戦派の彰義隊^(しょうぎ)に合流しました。5月15日に起きた上野戦争で約2割が戦死し、逃げ延びた隊士の多くは箱館戦争に参加し旧幕府軍と最後まで行動を共にしました^(最終的な戦死者は21人)。

当時、高田藩は奥州に3万余石の分領があり、釜子陣屋^(かまのこ 福島県白河市)が統治していました。同陣屋には30余人の藩士が家族と共に詰めていました。戊辰戦争が始まると、高田との連絡がつかず、奥羽越列藩同盟に加盟する諸藩に取り囲まれていたことから、同盟軍と共に行動しました。釜子陣屋の藩士は釜子団と名乗り、最後は会津若松城に籠城し敗戦を迎えました^(最終的な戦死者は16人)。

北越戊辰戦争による民衆の負担

北越戊辰戦争の開始から奥羽諸藩の降伏までには、約5か月の期間を要しました。この間、越後では戦火に見舞われた地域も多く、民衆は多大な被害を受けただけでなく、戦争に協力するために大きな負担も強いられました。

下のグラフは北越戊辰戦争が行われた1886年(慶応4/明治元)に高田宿が提供した人足と馬の月別の合計値を表したものです。数値が高くなっている3月は、北陸道鎮撫総督が来高した後、軍勢を率いて関東に下向しています。閏4月から9月までは、越後及び奥羽での戦争が繰り返されていた期間であり、10月は新政府軍が戦地から引き揚げてきた期間に当たります。このように、新政府軍の動きに伴って、高田宿が提供した人馬が大きく増加していることが分かります。ちなみに、同年に人馬へ支払われた賃金の合計は14,528両余りですが、その8割強の11,959両余りが赤字となり、高田宿が負担しています。無論、これは新政府軍の本営が置かれた高田宿に限ったものではありません。高田藩内の各宿が新政府軍に提供した人足は649,795人、馬は45,465匹にも上りました。このほか、直江津今町からは軍需物資が船で各地に運び出されましたが、その総数は924艘で、高田藩内の人馬の賃金と傭船料^(ようせんりょう)の合計は32,446両余りに達しました。

1886年(慶応4/明治元)に高田宿から新井・春日新田・中屋敷の各宿へ継送りされた人馬



民衆の負担は、これだけにとどまりませんでした。宿駅の負担のない村々からは「夫人足」が男性100人につき1.43人の割合で徴用されました。この夫人足は、軍に帯同して大砲や弾薬の運搬、陣地づくりや炊き出しなどに従事するもので、中には戦場で命を落とす場合もありました。また、農繁期に人手をとられたため、各家にとっても大きな負担となりました。各村では、村方三役(庄屋・年寄・百姓代組頭)を除く18歳から50歳までの男性の中からくじ引きで夫人足を選びました。夫人足は無給ではなく、夫人給が支払われましたが、基本的に各村が負担しました。

この戦争では、戦地で使用する物資の徴発も行われました。高田から新政府軍が出発したのは閏4月21日ですが、高田藩は同月27日に村々へ1軒につき「わらじ、10足ずつ、味噌や香のもの(漬物)、梅干しを少々ずつ、白米にした兵糧米を供出するように命じています(『高田市史』第1巻は、徴発した物資に対しては伝票が発給され、官軍会計所で換金できたと記している)。そして、朝廷領となった旧幕府領の村々に対しても高田藩と同様の命令が出されています。このほか、同月26日には直江津今町の苗字御免の有力者に対して、「味噌ならびに同香のもの」を献納するように高田藩の触元役所から指示が出されています。

金谷山に残された北越戊辰戦争の墓碑

会津墓地 会津若松落城後、城中の藩士は猪苗代、城外の藩士は塩川(喜多方市)で謹慎、藩士の家族は喜多方へ立ち退きが命じられました。その後、新政府は猪苗代の藩士を松代藩、塩川の藩士を高田藩が幽閉するように命じました(松代藩の奥願が受け入れられ、猪苗代の藩士は東京の講武所と護国寺に収容)。明治2年(1869)1月17日から27



会津墓地

日にかけて6隊に分かれて計1,742人の会津藩士が高田に到着し、寺町の55か寺に幽閉されました。この時、善導寺には高田藩が会津藩士を監視する会議所が置かれ、来迎寺には病院が設けられました。会津藩士は新領地の斗南藩(と なみ 青森県 むつ市)に引き渡される明治3年6月まで高田で過ごしましたが、待遇が行き届かなかったためか、1年半の間に67人の病死者を出しています。亡くなった人々は、金谷山麓北東部(字山 屋敷)の通称「会津墓地」に葬られました。なお、幽閉を解かれた会津藩士の中にはそのまま高田にとどまった人々もあり、会津墓地にはこれらの人々に関係すると思われる墓30余基も存在します。

官軍墓地 雪峠の戦い(小千谷市)以後、中越地域では激しい戦闘が繰り広げられました。北越戊辰戦争開戦当初、高田には本営が置かれ(後に柏崎に移動)、また戦場となった地域から離れていたこともあり、慶応4年(1868)6月10日には、寺町の来迎寺に新政府軍の傷病兵を収容する病院も設置されています。このため、北越戊辰戦争で戦死した薩長などの兵士は金谷山麓南東部(字稲 干場)の通称

「官軍墓地」に葬られました。当初は、戊辰戦争で戦死した薩摩藩64人(個々の墓碑は、大正6年6月に合同墓碑に改葬)、長州藩(墓碑銘は山口藩)55人、豊浦藩(長州藩の支藩)16人、親兵(近衛兵)3人、高田藩57人が埋葬されました(戦死者数は『金谷村史』による)。後年、西南の役、日清戦争、日露戦争の戦没者の墓碑も建立されました。なお、戦前、この墓地には招魂社が建てられており「殉難墳墓地」(金谷村史)、「陸軍墓地」(高田市歴史公文書)とも呼ばれ、国有地となっていました。



官軍墓地